

## 第 6 回世界自然保護会議の印象記

安藤元一

(JWCS会長・ヤマザキ学園大学教授)

第 6 回世界自然保護会議 (WCC: World Conservation Congress) が 2016 年 9 月 1~10 日にホノルルで開催され、この会議のフォーラム部分に参加した。会議概要紹介でなく、会場で感じた個人的な印象を、過去の会議とも比較して記してみたい。

### 1) WCC とは

IUCN は 1948 の設立以来、議決の場として 2~3 年毎に総会を開催してきた。1996 年からは前半がフォーラム、後半が総会という 2 部構成の世界自然保護会議として、4 年毎に開かれている(表 1)。今回の開催地である米国は本年が国立公園局創立 100 周年であり、8 月にはハワイ付近の海域に日本国土面積の 4 倍という世界最大の海洋保護区の設置が発表されている。

フォーラムにおける主要テーマの変遷をみると、気候変動や生物多様性は 20 年間変わらぬ課題である。人々と自然との関わりも、第 1 回会議から多くのワークショップ

で強調されている。第 3 回 (2004) では健康や生活様式の多様性がとりあげられ、第 5 回 (2012) の全体テーマ「Nature+ (ネイチャープラス)」は、私たちの生活のあらゆる側面が自然とつながっているという、生態系サービスの発想であった。今回の全体テーマである「岐路に立つ地球」でも同様に、貧富の差、経済成長による生態系への影響、自然資源の保全と人類の福利向上などが重視された。生態系そのものだけでなく人とのかかわりを重視するトレンドは、湿地生態系を扱うラムサール条約締約国会議にも見られる。

### 2) 大会議としての長短所

前回 (WCC5) のプログラムでは 1 日を総会とフォーラムの 2 部に分け、各日のフォーラム成果を翌日の総会に反映させるというユニークな日程が組まれた。しかしアイデア倒れだったのか、今回は以前の日程に戻った。

今回会議の参加者構成は未発

表なので、前回会議の評価レポートからみると、国別構成では近隣国からの参加者が約半数を占めている(表 2)。こうした会議を世界各地に持ち回りするのは意味あることと言える。年齢構成では働き盛りの人たちが中心であり、若い大学院生などの多い学会とは異なる。女性の比率は約 3 割だが、男性の多い政府代表を除いて NGO 参加者に限れば、女性比率はもっと高くなるだろう。

表 2. WCC5 (2012) に  
おける参加者構成(%)

アフリカ	8
中南米	8
北米	14
東南アジア	46
西アジア	2
オセアニア	4
東欧・中央アジア	2
西欧	14

#### 年齢構成

30以下	9
30-49	51
50-64	34
65以上	6

男:女 = 68:32

(IUCN 評価報告から)

参加者 1 万人以上とされる世界最大の自然保護会議なので、コンベンションセンターの会議室はフル稼働である。しかし分科会が多くなると、参加者にとっては参加したい企画が重複してしまうので、平行イベントを増やすこと

表 1. これまでの世界自然保護会議 (WCC)

	WCC1 1996 モントリオール	WCC2 2000 アンマン	WCC3 2004 バンコク	WCC4 2008 パルセロ	WCC5 2012 済州島	WCC6 2016 ホノルル
日数	11	8	9	10	10	11
参加者数	不明	不明	>5,000	>8,000	>10,000	>10,000
日本参加	不明	不明	不明	>50	>40	>50
イベント数	不明	不明	約 460	不明	>550	>900
全体テーマ	不明(生物多 様性が中心)	エコ スペース	人類と自然: たった一つの 世界	多様で持続 可能な世界	Nature+ (ネイチャー プラス)	岐路に立つ 地球

にも限界がある。参加できる日数にも限界がある。フォーラムを飛ばして総会だけに参加していた政府代表も多かったようである。

総会においても、限られた日数であまりに多くの提案を審議せざるをえず、提案が十分に討議されずに採決されるという問題があった。前回会議では議事効率化のために用紙投票から電子投票に変わったが、今回は更に、事前のネット投票という方法も採用された。しかしネット上での意見交換には疑問を感じた参加者も多かったようだ。会議終了後に、動議採択のプロセスに問題がなかったかというアンケートメールが参加者に送られてきたことをみると、処理件数が多すぎるとの問題は事務局も認識しているようである。

### 3) フォーラムの構成

フォーラムは次のような企画から成り立っている。

ハイレベル・ダイアログ：保全と持続可能な開発に関する基調講演的な内容で、6回開催。

保全事例/ワークショップ：フォーラムの中心となる要素であり、各2時間で特定課題に関する事例を紹介したり、新知見を現状にどのように応用するかを論じる。テーマは多様であり、「スピリチュアルと保全」といったワークショップまであって、満室になっていた。

ナレッジカフェ：12人までの小グループによる各2時間のテーマ別円卓討議。各自の経験をもとに

討議し、協力の可能性を探る。スライドを用いない言葉だけの論議なので、ある程度の事前知識が必要であり、情報収集目的で参加するには抵抗があった。

バビリオン：米国政府機関のブースはこれまでと同様にアクティブであり、海洋大気庁（NOAA）は温暖化のレクチャーを繰り返していた（図1）。米空軍や海軍もブースを設けていた。米軍は世界各地に広大な基地を持ち、その環境保全は軍の仕事である。また基地間の移動は税関や検疫所を通らず行われるので、軍は外来種の管理にも関わってくる（図2）。

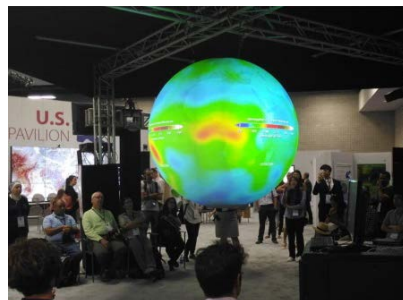


図1. アメリカ海洋大気庁（NOAA）のブース



図2. 米空軍のブース

ロシアは広大な国土を持つにもかかわらず、これまでこうした国際会議への参加はたいへん少なかった。しかし今回はロシア環境天然資源省が活発にブース出展してい

た（図3）ブースでの講演では、ロシアの保護区にはロシア革命の頃からの歴史があり、厳格な利用制限が特徴であってレクリエーション利用を前面に出した米国の国立公園とは異なることが話されていた。これまでこうした話を聞いたことがなかったので印象に残った。



図3. ロシア環境天然資源省のブース講演

ポスター：ポスター発表は発表者と相対で議論しやすいので、学会では主要な発表方法である。しかしWCCでは前回も今回もマイナーな扱いであった。今回のポスター発表は紙媒体ではなく、画面上で行われるE-ポスターであった（図4）。これは会場のスペース節約には役立つだろうが、発表者と話すためには事前に演題を検索して調べておく必要がある。自分の専門分野における発表はキーワード検索可能であるが、興味ある異分野の発表を会場でみつけ、発表者と交流するのは実質的に無理である。ペーパーレスは一覧性とのトレード・オフであると感じた。



図 4. ポスター会場

コンサベーションキャンパス: 特定分野にかかる新しいスキルや知識を身に付けられるような、相互学習形式の半日/1日の研修コースである(会議前・後の on-line 活動を含む)。

ソーシャル・イベント: レセプションは会議のおまけのように考えられがちだが、いろいろな人と知りあって交流するには最適の場である。見知らぬ人に声をかけるのも自由なのだが、これだけ大きな会議だと、当たり外れが大きい。知り合いを通じて関連分野の方に紹介してもらったり、自分が紹介する側に回るのが効率的である。

#### 4) 特徴的なテーマ

レジリエンス: 本来自然の持つ頑健性・回復力(Resilience レジリエンス)を高めることは、前回会議に引き続いて多くのワークショップがテーマにしていた(図 5)。レジリエンスは環境分野における近年の流行語であるのか、発表タイトルがレジリエンスであっても、話の内容はレジリエンスとは思えない例も散見された。こうした発想は湿地保全におけるセルフ・デザインなど 1990 年代から存在したが、

インドネシア大津波(2004)、ハリケーン・カトリナ(2005)、東日本大震災(2011)などの災害経験から重視されるようになったのだろう。



図 5. 多くの企画がレジリエンス(回復力)に言及

SDGs: 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)は昨年 9 月の国連持続可能な開発サミットで採択された旬なテーマであり、多くの発表が SDGs に言及していた。SDGs の 17 目標を表すシンボルマークを、いろいろなイベントで見かけた(図 6)。あるワークショップの発表者が、「我々が努力してきた保全とは、つまるところ持続可能な開発と同義であった」と述べ

ていたのが印象に残った。SDGs は 2001 年に策定されて一定の成功を収めたミレニアム開発目標(MDGs)の後継目標とされるが、注目度は SDGs の方がずっと高いように思える。その理由の一つに、わかりやすいシンボルマークが挙げられる。ある現象を一目で象徴できるアイコンやネーミングは、ときに大きなインパクトをもたらすことがある。

#### 5) 日本とのかかわり

保全と保護: 会議名の和訳が「保全会議」ではなく「自然保護会議」であることに疑問を感じた。わが国ではいまだに保護は開発と対立するものと捕らえられがちであるが、会議の主たる関心は持続可能な開発に変化していた。IUCN は 1948 年の設立時には International Union for Protection of Nature (IUPN) と称しており、「国際自然保護連合」という和訳はぴったりであった。しかし名称は 1956 年に International Union for



図 6. SDGs のシンボルマーク



Conservation of Nature and Natural Resources (自然及び天然資源の保全に関する国際同盟)に改称され、保護という用語は使われなくなった。環境問題という言葉さえなかった半世紀以上前から、保全や天然資源を視野に入れた組織名称であったことに驚く。1990 年からは World Conservation Union と更に保全を前面に出した組織名に改称したが、これは定着せず、2008 年に以前の名称に戻っている。

少ない参加: わが国からの参加者数は経済規模からみるときわめて少なく(表 1)、フォーラムの諸企画における日本のプレゼンスも目立たなかった(総会ではヒールとしての存在感はあったようだ)。国際会議に参加する目的は、一般的に 1) 自分の成果を発表する、2) 世界の潮流を知って自分の立ち位置を確認する、3) 同業の仲間と経験交流して奮起する、および 4) 異分野の人たちと交流できることである。今回の会議における日本は 1) については不十分である。生態系保全に関して日本に先進事例はたくさんある。ただし、何が先進事例なのかは世界を知らねばわからない。先進事例の発掘と発表が急務と感じた。

## 6) グリーン・ कांग्रेस

今回会議のポリシーはグリーン・ कांग्रेसであり、徹底したペーパーレスであった。冊子体のプログラムも、 कांग्रेस・キットも一

切配付されない。会場内のどこで何が行われているかを示す案内表示もない。参加者は事前にネットから情報を得ておくか、スマホやタブレットに会議用アプリを入れて情報を得るしかない。もともと、それが原因で会場を右往左往している人はあまり見かけなかった。このやり方もそれなりに機能しているのだろう。しかし最上位の参加者年齢構成に入る筆者としては、違和感が大きかった。プログラム・ブックくらいは配ってもよいのにと感じた。

一昔前の国際会議では各種資料やパンフレットが紙爆弾のように行き交ったものだが、今回はパビリオンで配付される紙パンフレットは少なくなり、URL のみを書いた名刺サイズのカードを置いたり、USB メモリーを配っているブースもある(図 7)。この方がコスト的にも有利だろう。

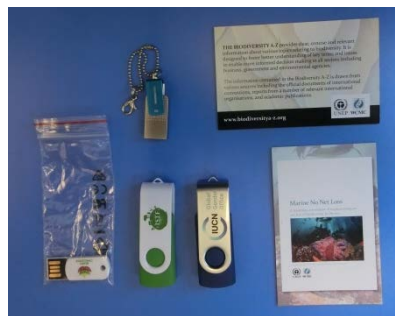


図 7. 配布物は USB メモリーや URL を記したカードで

蛇足であるが、会議を開くこと自体が地球環境に負荷をかけているという側面もある。参加者がボーイング 777(270 人乗、燃費 12 リットル/km)に乗って 6 千 km(日本・ハワイ間)を往復したと

仮定すると、1 人あたり 530 リットル(ドラム缶 2.6 本)の航空燃料を消費して 1.3 トンの CO<sub>2</sub> を排出したことになり、参加者 1 万人では 1 万 3 千トンに達する。会議の趣旨からすると、参加者はこれを上回る地球環境への貢献義務を課せられたともいえる。